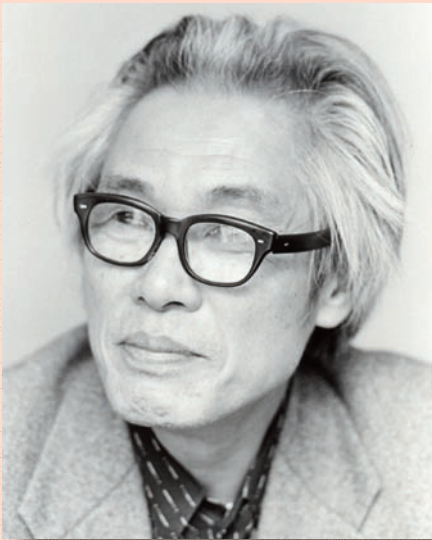


小説

うえのえいしん
上野英信

山口市
(1923～1987)



© 本橋成一

【著作】

『せんぷりせんじが笑った!』（昭和30・柏林書房）
『追われゆく坑夫たち』（昭和35・岩波書店）
『上野英信集』全5巻（昭和60／61・径書房）ほか

上野英信（本名、鋭之進）の出生地は山口市阿知須である。出生当時、井関村と言われていた。青畑、引野を経て瀬戸内海へと注ぐ井関川の河口は宇部炭田で産出される石炭を運ぶ船の出入りするところであった。英信の父親は、船乗り稼業であった。父の転職で福岡県八幡市（現・北九州市八幡区）へ移住。英信七歳の時だった。以後、同世代の人たちすべては、太平洋戦争へと向かう国策とかかわらざるを得なかった。多くの人命が失われる中、生きて故国の土を踏むことができた奇蹟的運命を礎として、後年、文学へ依拠することになるのだが、文学の原点となった決定的な出来事は、広島における被爆体験であった。昭和十八年（一九四八）、満州建国大学生として召集された彼は、その二年後の八月六日、広島市の宇品に駐留する部隊にいた。英信二十一歳のことであった。上野文学の出発点である。一方、彼が他郷（福岡県）にあった晩年、「ああ、こうこの煮食いがたべたい」と言っただが、幼少時の味覚体験から、阿知須への郷愁が感じ取れる。京都大学中退後、炭鉱における坑内労働に従事。死と隣り合わせた生活者たちとの交流から得た人間への信頼と愛は、同じ阿知須町出身の作家中野真琴との往復書簡から窺い知ることができ。昭和六十二年（一九八七）十二月十六日の日刊ウベニチの記事「上野英信さんからの書簡」第四信（昭和二十七年（一九五二）八月五日、福岡県遠賀郡水巻町吉田御輪地、副田寛方より出されたもの）に次のように記されている。

「私をこの地とこの民衆にみちびいてくれたものは、疑ひもなく文学であり、その点わたしは今しみじみと文学に感謝するばかりです。勿論文学の根底《底》そのものには、人間に対する無限の信頼と愛情が存在するのでせうけれど、愚鈍なわたしは今になって漸くこんなことに気づき、まるで奇蹟のように驚いてゐるのです。と同時にこれまで気づかなかったその文学の本質的なものにわたしをみちびいてくれたのは外ならぬ民衆でせう。その点わたしは今つきない感謝を民衆にささげるのです。」

この書簡にこめられた想いこそが、多くの著作を生み出す原動力となったように思われる。

（文・大野光生）



生誕地吉敷郡井関村（現・山口市阿知須）
遠景、東から西に向かって撮影



筑豊文庫設立時
左より：正田誠一、上野晴子、英信（提供：上野朱）

上野英信 年譜

（提供・大野光生）

大正12（一九二三）年

昭和5（一九三〇）年

昭和11（一九三六）年

昭和16（一九四二）年

昭和18（一九四三）年

昭和19（一九四四）年

昭和20（一九四五）年

昭和21（一九四六）年

昭和22（一九四七）年

昭和23（一九四八）年

昭和30（一九五五）年

昭和31（一九五六）年

昭和33（一九五八）年

昭和34（一九五九）年

昭和35（一九六〇）年

昭和36（一九六一）年

昭和39（一九六四）年

昭和40（一九六五）年

昭和42（一九六七）年

昭和44（一九六九）年

昭和46（一九七二）年

昭和48（一九七三）年

昭和52（一九七七）年

昭和59（一九八四）年

昭和60（一九八五）年

昭和62（一九八七）年

七歳

一三歳

一八歳

二〇歳

二二歳

二二歳

二二歳

二四歳

二五歳

三二歳

三三歳

三五歳

三六歳

三七歳

三八歳

四一歳

四二歳

四四歳

四六歳

四八歳

五〇歳

五四歳

六一歳

六二歳

六四歳

8月7日、父上野彦一、母ミチの長男として、山口市吉敷郡井関村（現・山口市）に生まれる。本名鋭之進。

父の転職で八幡市（現・北九州市八幡西区）黒崎妙見町に移住。

3月、黒崎尋常小学校卒業。4月、福岡県立八幡中学校入学。

満州建国大学前期（予科）新二年に入学。

1月、建国大学後期（学部）文政学科に進む。12月、学徒召集により、山砲兵として入営。

陸軍船舶砲兵隊に転属。

8月6日、広島宇品駐屯所にて被爆。以後、原爆後遺症に悩まされる。

京都大学文学部支那文学科に編入学。

大学中退。福岡へ移る。

筑豊に入り、九州探炭海老津炭鉱へ採炭夫として就職。以後、日本炭礦高松第一坑、三菱崎戸炭鉱、日炭高松第三坑で掘進夫、採炭夫として働く。日炭高松第一坑時代、同僚であった

中川一政門下の画家千田梅二らと炭鉱労働者文芸誌『労働藝術』をガリ刷りで発行。

日炭高松第三坑退職、4月、三菱鉱業会社崎戸鉱業所に就職。

筑豊炭鉱労働者工作集団を結成。『地下戦線』を創刊、五号まで続刊。

国鉄労組筑豊支部書記として働く。11月、千田の版画と上野の文章で『絵ばなし・せんぷり

せんじが笑った!』（私刊）を刊行。

『絵ばなし・せんぷりせんじが笑った!』が「ルポルタージュ・日本の証言」の一冊として、柏林書房より刊行。『絵ばなし・ひとくわばり』（私刊）刊行。

歌人畑晴子と結婚、同年末、朱を授かる。千田らと日炭高松文学・美術協議会を結成。『月刊たかまつ』の編集にあたるとともに、筑豊の炭坑夫の記録に取り組む。

谷川雁、森崎和江らと九州サークル研究会を結成、『サークル村』を刊行。同誌からは水俣

公害の告発者石牟礼道子や中村きい子らを輩出する。

夏、事務局を離れ、福岡市へ移住する。11月『親と子の夜』（未来社）を刊行。

8月、『追われゆく坑夫たち』（岩波書店）を刊行。以後、年一冊ペースで筑豊記録文学を

まとめる。

10月『日本陥没期』（未来社）刊。

福岡県鞍手郡新延の新旧尾炭鉱の旧炭住廃屋を改装し入居。

『筑豊文庫』創立。近隣のこどもたちに、剣道の指導をはじめめる。

5月『地の底の笑い話』（岩波書店）刊。

7月『どきめんと・筑豊』（社会新報社）刊。

11月『近代民衆の記録・巻二―鉱夫―』

4月『骨を噛む』（大和書房）刊。

10月『出ニッポン記』（潮出版社）刊。

3月『眉屋私記』（潮出版社）刊。4月趙根在と共同監修で『写真万葉録・筑豊』（葦書房

全十巻昭和61年完結）刊行開始。

5月『上野英信集』（径書房昭和61年第5集で完結）刊行開始。

11月21日、死去。

それにしても、と私は思う。――めぐりめぐって、このヤマに、つい夜のゆめを結ぼうとは。十六年前の冬の日のことが、しきりに脳裡を去来した。

私が生まれてはじめて坑夫となり、緊張と不安にわなわなふるえながら地底へもぐっていったのは、一九四八年の一月上旬のことであった。鹿児島本線の海老津駅から南へ小一里、長い暗い隧道をくぐって、マツチ箱のような木製の炭車がワイヤロープに曳かれてことごと走っているエンドレス

車道の終点の、奥海老津炭鉱が、私のはじめてのヤマであった。このヤマを私に紹介してくれたのは、学生時代の友人の父親のYさんであった。Yさんは、筑豊御三家の一つとして有名な貝島大之浦炭鉱の高級職員であった。私がまだ学生であったころ、

彼は私を案内して、その巨大な炭鉱の坑内見学をさせてくれたことがあった。その時である。二年前の夏の日の朝が、不意に私の体によみがえった。広島地獄を見、広島

島の地獄を生きた人間の一人として、私は終世、人間そのものとしての地獄を生きる

よりほかに、地獄を逃れる途はないのだと思

った。私は地底の闇にとり憑かれたように

に大急ぎで京都へ引き返して大学をやめる

やいなや、ふたたび彼の所へとんでいって、

適当なヤマに入りたいと頼んだ。

『屍鉱譜』（筑摩書房）より

上野英信